

スパイ・バウンド

2005(平成17)年2月10日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★



監督・脚本・脚色＝フレデリック・シェンデルフェール／出演＝モニカ・ベルッチ／ヴァンサン・カッセル／アンドレ・デュソリエ／ブリュノ・トデスキーニ／リュドヴィック・シェンデルフェール（コムストック配給／2004年フランス映画／110分）

……『007』シリーズは別として、本格的スパイ映画は面白いけれども難しいものが多い。1985年に現実起こった「虹の戦士号」爆破事件をネタに、モニカ・ベルッチがアメリカのCIAに相当するDGSE（フランス対外治安総局）の女スパイに扮したこの映画は、ストーリーよりもスパイの人間性に焦点を当てたもの。共演のヴァンサン・カッセルとは1999年に結婚し、2004年9月に第一子をもうけたばかりだから、息はピッタリだが……？



『007』と『0011』

スパイ映画を一躍世界に広めたのは何ととっても、イギリスの諜報部員、ジェームズ・ボンドを主人公として、1962年の第1作『007/ドクター・ノオ』から始まった『007』シリーズ。この第1作の公開時のタイトルは『007は殺しの番号』であったことからわかるように、この「00ナンバー」のスパイは、殺人オッケーの特典(?)を持った者……？

初期のシリアスなものから、少しずつハデハデしいアクションものに変容していったのは残念だが大衆受けのためには仕方なし……？ また『男はつらいよ』のマドンナ役と同じように、『007』シリーズには毎回「ボンドガール」が登場するのも映画のつくり方としては当然だし、楽しみの1つ。さらに1作ごとのテーマ音楽はすばらしいものが多く、今でもよく演奏されている。そのうえ、ボンド役が①ショーン・コネリー、②ロジャー・ムーア、③ティモシー・ダルトン、④

ピアーズ・ブロスナン、とスムーズに「代替わり」していったのもある意味では驚異。『007／ダイ・アナザー・デイ』（03年）で20作目を迎えたが、これからもなお続けてほしいシリーズだ。

これに対して『0011ナポレオン・ソロ』は、1960年代大人気を呼んだテレビ番組だが、1965年以降劇場用映画としても8本が製作された。女好きでちょっとおとぼけのナポレオン・ソロ（ロバート・ボーン）と気真面目一方なイリア・クリアキン（デビッド・マッカラム）2人のかけ合いが面白く、一時は本家『007』を抜くほどの人気沸騰……？

このように、1960年代に始まった『007』と『0011』シリーズは、スパイ映画を一躍全世界に知らしめた功労賞モノの映画！

傑作スパイ映画あれこれ

1950年～60年代は米ソ対立、東西冷戦の時代だったから、スパイものもそんな現実を受けたシリアスな作品が多かった。その中の傑作を私の記憶で思いつكماまに2つ挙げれば、リチャード・バートン主演の『寒い国から帰ったスパイ』（65年）とポール・ニューマン、ジュリー・アンドリュース共演の『引き裂かれたカーテン』（66年）だ。

また、東西冷戦より前の第1次世界大戦中の有名なドイツの女スパイを描いた映画がジャンヌ・モロー主演の『マタ・ハリ』（65年）、これも大傑作。

これら傑作スパイ映画の何が面白いのかというと、とにかくシリアスな人間描写。『007』と『0011』シリーズのスーパーヒーロースパイ（？）は絵空物語として楽しむべきスパイ映画だが、ホンモノのスパイはそうではなく、日本の忍者（忍びの者）と同じような過酷な職業。そんなスパイを主人公にした映画は、当然シリアスで人間描写豊かなものでなければウソ！

最近の日本映画の大作『スパイ・ゾルゲ』（03年）も傑作だったし、大いに日本の近代史の勉強になるものだった。

「東洋のマタ・ハリ」川島芳子と李香蘭

日本経済新聞の最終頁にある「私の履歴書」に2004年8月1日から8月31日ま

で連載されていた、李香蘭こと山口淑子の物語（昭和私史）が単行本として出版された。それが『「李香蘭」を生きて—私の履歴書』（山口淑子著・2004年・日本経済新聞社）というもの。

この李香蘭こと山口淑子と親交深かった人物の1人が、満映（満州映画協会）の2代目理事長となった甘粕正彦。彼は元憲兵大尉で、1923年の関東大震災の際、無政府主義者の大杉栄、伊藤野枝らを虐殺したとされる有名な人物。そしてもう1人は、満州王族の娘として生まれた川島芳子。

この川島芳子は満朝復活のために中国に渡り、「男装の麗人」「東洋のマタ・ハリ」と呼ばれた有名な人物。

この本によれば、同じ「よしこ」同士である山口淑子と川島芳子との出会いは1937（昭和12）年と記されており、その後の親交ぶりもきわめて興味深い。しかし1945年8月15日の終戦と日中戦争の終了後、関東軍と行動を共にしていた川島芳子は「漢奸」として中国民衆から厳しく糾弾され、結局1948（昭和23）年3月、北京で銃殺刑によって死亡することに……。当時41歳だったとのことだ。

こんな川島芳子と姉妹同様に育ったため、波乱に富む人生を歩むことになった李香蘭をテーマとして劇的に描いたのが劇団四季のミュージカル『李香蘭』。楽しくかつ勉強にならないはずがない、是非多くの人に観てもらいたい、私の大好きなミュージカルだ。

「虹の戦士号」とは？

この映画のネタとなったのは、1985年の「虹の戦士号」爆破事件とのこと。アメリカのCIAばかりが世界の情報戦を操っているかのような印象があるが、そうではない。イギリスやフランスだって同じようなことをやっているのは当然。「虹の戦士号」爆破事件は、ニュージーランドのオークランド港で「虹の戦士号」が爆破され、沈没した事件だが、そこで逮捕された2人の男女がDGSE（フランス対外治安総局）のスパイであることが判明したから大変！

当時のフランスはミッテラン大統領だったが、フランスの核実験をめぐるニュージーランドとの確執があったため、このスパイたちの処遇が大問題となった。さてその結果は……？

色気抜き（？）のモニカ・ベルッチの出来は……？

この映画の主人公であるリザを演じたのはモニカ・ベルッチ。モニカ・ベルッチといえば、『マレーナ』（00年）と『アレックス』（02年）の2本が代表作で、とにかく色気タップリのイタリア人美人女優。

2004年、フランスのテレビ局が行った、「最も美しい女性の人気投票」では、並いるフランス人女優を抑えて第1位に選ばれたとのことだから、フランス人女優も真っ青……？

『マトリックス リローデッド』（03年）、『マトリックス レボリューションズ』（03年）での役は、あまりにもボディラインを強調しただけのつまらない役で失望したが、『パッション』（04年）で見せた美しさはさすが。もっとも、彼女は1968年生まれだから既に37歳……。

この映画では全く色気抜きで、女スパイとしての任務遂行に悩みながらも全力を尽くす人間像を演じているためかもしれないが、女性としての魅力、輝きがほとんど感じられないのはちょっと残念。色気ムンムンの女スパイは願い下げだが、少しくらいは、彼女の美貌を引き立てる華やかなシーンを盛り込んでもよかったのでは……？

特に後半、囚人服に身を包んで悩みながらも獄中での与えられた任務を遂行する姿は「なるほど」と納得できるものの、あまり魅力的なものではない。もっともこれは、私があまりにも彼女に変な期待をかけているためかも……？

ヴァンサン・カッセルは？

もう1人の主人公は、これもDGSEの職員で、上層部が立案した「ヤヌス作戦」のリーダーとなるのがジョルジュ。このジョルジュを演ずるヴァンサン・カッセルは、『オーシャンズ12』（04年）で、レーザー光線を避けて侵入するべく、驚異的な肉体鍛練をしていた姿と、真っ白のスーツをパリッと着こなしたカッコいい姿を見せていたフランス人俳優。

モニカ・ベルッチとの共演が多かった彼は、実生活においても1999年に彼女と結婚し、2004年9月に第一子（娘）が生まれたとのこと。

ヤヌス作戦とは？

ヤヌス作戦とは、武器商人、イゴール・リポヴスキーによるアフリカのアンゴラのゲリラへの武器輸出を止めさせるための作戦のコード名。その情報収集のため、リザはスイスのローザンヌにあるリポヴスキー邸にベビーシッターとして入り込んでいた。

その結果、武器を乗せた「アニタ・ハンス号」は、10日後にモロッコのカサブランカに入港するとの情報をキャッチ。偽造パスポートを支給されたりザとジョルジュは夫婦を装いカサブランカへ。さらに、仲間たちとともにさまざまな手配を施し、なんとか「アニタ・ハンス号」の爆破に成功した。

めでたし、めでたしの結果で、ここまでは筋書き通りだったが……。

スパイたちの人間模様がテーマ

帰路に着いたスイスの空港で、なぜかりザは呼び止められて尋問を受けることに。そしてリザのバッグからは大量のヘロインが……？ これは一体何だ！ 誰が、何のために、こんなことを仕組んだのか？ そこから始まるスパイたちの人間模様が、この映画のテーマだ……！

そしてこのテーマに現場のスパイたちへ指令を出す冷酷な上層部の男（ブリュノ・トデスキーニ）との確執や、部下への愛情と命令への絶対的服従の板挟みとなって苦渋するグラセ大佐（アンドレ・デュソリエ）の心の葛藤が絡んでスリリングなストーリーが展開していく。

そのため、この仕事で任務を終了したらスパイの道から足を洗おうと考えていたりザの希望は吹っ飛んでしまうとともに、長年 DGSE に忠誠を尽くしてきたジョルジュも、冷酷な上層部の仕打ちに対して遂に牙を剥かざるをえないことに……？

スパイと探偵は似ているか？

この映画のパンフレットには、総合探偵社ガルエージェンシー代表取締役、渡邊直美氏の「スパイと探偵、似ているところがあると思いますね」という解説が

あるが、私はこれを読んで唖然とした。それは、そのタイトルどおり、スパイと探偵を比較しながら、「似ているところがある」などと両者を客観視し、また対等の目で比較しながら解説していることだ。

しかし探偵と違い、この映画に登場するフランスのDGSEや、アメリカのCIA等の諜報機関は、すべて国益のため必要不可欠との前提のもとに、法律にもとづいて設置されている国家機関。昔、日本にもあった「陸軍中野学校」もこれと当然同じ類のもの。

しかし探偵とは一体何か？ イギリスのシャーロック・ホームズなどは、警察とは違う独自の観点から犯人捜しをする知的職業として「存在」していたし、日本でも明智小五郎や金田一耕助などの「名探偵」は、世のため人のため、その知力を駆使して犯人捜しを「行っていた」ようだ。

しかし、現在日本にあるいわゆる探偵社や興信所はこんな名探偵とは全く異質なモノ。探偵社や興信所などは一言でいえば「民間調査機関」だが、これには現在何ら公的資格はなく、それを規制するための法律もない。しかし、就職や結婚に伴う素行調査や、浮気・不倫調査、さらには財産調査や企業の信用調査など、探偵社や興信所へのニーズが存在していることは事実だし、近年そのニーズが高まっていることもまちがいない。

そこで近時問題となっているのが、探偵社と依頼者との間のトラブルの多発。そんな中、2004年11月、大阪弁護士会の有志が「悪徳探偵研究会」を結成し、12月4日には「悪徳探偵110番」を実施したことが報道された。そのトラブルは具体的には、①まったく調査をしていなかったり、または十分な調査をしないにもかかわらず、調査料金を請求する、②初めは安い金額を指定しておき、追加料金（フィルム代、現像費、報告書作成費、機材使用費、深夜割増、盗聴器取り付け費用等の名目）と称して莫大な金額を請求する、③そもそも費用体系が不透明で、思いがけない高額な費用を請求する、等だ。

このように、近年探偵業のよって立つ基盤や現実の営業における問題点がクローズアップされている中、このパンフレットの解説を読むと、得意気に探偵業のノウハウを披露し、自分が探偵になった動機や適性等を語っているが、果たしてこれは……？

2005(平成17)年2月12日記